

2021. 12. 26. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書5章1～20節
『生活の場に帰る』

さまざまな目の覚めるような能力や豊かな財力、そして共通した価値観を持つ人々を集めれば、それだけで団体としてのまとまりがよくなります。どのような団体であっても、何らかの目的を持つ団体を構成する時にはそういった配慮をするのは当然でしょう。しかし、そのような配慮をまったく必要としない、つまり雑然としたままでよい、というよりは雑然としたままでなければならないような団体があります。それが教会です。教会とは、雑然としたものが互いにいたわり合いつつ生活する場のことなのです。そして、共に生活する場であるということが何か目的を果たすための条件ではなく、その雑然とした生活の場自体が目的であることを忘れてはなりません。

本日与えられた聖書の箇所は、イエスが初めてゲラサ人の地方、つまり異邦人の地に歩みを進められたという記念すべき記事なのです。

この物語はマルコが生きた社会、従って初代教会が持っていた異邦人伝道に対する度合いの深さをうかがい知ることが出来ます。当時の初代教会にとつて、異邦と関わることは自分にとってどういう状況が産み出されるのだろうかという問題提起でもありました。

さて、ゲラサというのはガリラヤ湖から南南東に55キロ程の所にあった町です。ユダヤからみると被差別の地でした。マルコは特に嫌われていたこの地を最初の異邦人との出会いの場として設定したのです。

2節以降の「汚れた霊・墓場。足枷や鎖」等の過剰な表現は当時のユダヤ社会がいかに異邦の人々を見下してい

たかを物語っています。文化や習慣の違いが偏見を助長させます。例えば墓場に住んでいたという物言いは、洞窟や堅穴式の住まいのことを指すといった具合でした。

9節には「レギオン」という軍事用語も飛び出します。レギオンとはローマの軍団の単位で4200～6000人(騎兵300騎を含む)の編成でした。主に攻撃に特化した編成です。異邦人は攻撃性に充ち満ちているという理解が、出会い

を持ったこともないのに広く一般化していたということでしょう。

これらを象徴する「その人」はイエスと出会います。6～14節の下りは劇的にその出来事を描写しています。それはゲラサの人々が福音の前に悔い改めたというおめでたい物語ではなく、初代教会を含むユダヤという既成社会が固持していた差別性がゲラサの人々との出会いによって叩き壊されていったという物語なのではなかったかと思うのです。レギオン(攻撃性)という偏見や豚という差別性は併せて消え去ってゆくのです。ここに福音という具体的な生活の場があらわにされてゆくのです。

差別や被差別に取り沙汰されていた悪夢を取り除くと15節にありますように無力ではあるが「正気にもどった一人の人」が残りました。いや、産み出されたといったほうが正しいでしょう。イエスはこの人に「自分の家に帰りなさい」と勧められます。福音とは、社会の束縛や偏見からの解放です。社会のカラクリを紐解かれて福音という自由を獲得した者は何処あろう、自分の生活の場へと帰されて行くのです。そして、雑然としたままであっても、そこで福音のために立ち働くことを喜びとして受け入れ直して行けるのです。これをキリスト者というのです。